

書 評

『再保険の基礎とチャレンジ』

石井 隆 著

皆さんに本書評をお読みいただく前に、押さえておいていただきたい悲しい現実がある。日本の損害業界合計の火災保険収支は2022年度まで13年連続赤字、23年度は

未確定ながら赤字脱却はおぼつかない状況である。お察しの通り、赤字の要因は大規模自然災害の頻発化、重大化。元受各社の懸命な努力や保有再保険戦略上の工夫は

一定の効果を発揮しているものの、いまだ十分ではない状況である。その他にも巧妙化・高度化するサイバーリスク、超巨大企業のサブライチエーションをめぐる事業運営リスク、地震保険制度の対象となっていない事業者に対する地震リスク等、損害業界として本格的に取り組むべき難しい課題がすぐ目の前に横たわっている。

長年引受戦略・保険商品開発に携わってきたA級戦犯がモノ申しても説得力がないかもしれないが、損害業界の若手・中堅の方々には「保険と再保険」についてこの機会に再度考えてみる意味は大いにあると思う。本書は保険の歴史から再保険の成り立ち、再保険の実務と今後のチャレンジについて

III部の「再保険のチャレンジ」では著者の長年の主張が色濃く出ている。「サイバーリスク」「NDBI(財物損害を伴わない事業中断リスク)」「大規模自然災害」「新しい再保険」等に関する、自説が展開されている。

豊富な経験持つ著者が基礎から解説

えが再保険である。保険も再保険も万能ではないものの、社会の中では地味ながら「いい働き」をしていると自負していると思う。

再保険実務経験を豊富に持つ著者が丁寧に記述しており、是非一読いただくことをお勧めする。第一部では「再保険の基礎」と題しているが、

が絵に描いたようによくわかる。英国におけるロイズ再保険市場の発展、欧州大陸における再保険会社の勃興、ホルティモア大火やサンフランシスコ

再保険は、トリガーを「物理的損害の発生(通常オプシオンは「対象商品の価格の上下」とするレバレッジの高いオプシオンである。そもそも金融取引の中ではハイリスク商品に属することは間違いない。それぞれの市場がグロ

バルに交錯しながらリスク処理に当たっている。良い時があれば悪い時もあり、M&Aも元受保険会社以上にダイナミックなものだが、トレンドと特徴を感じるだけでも意味はあるであろう。その後のパートでは伝統的な再保険から派生してきたリスク管理手法として「キャプティブ再保険」「ART (Alterna Live Risk Transfer)」「ファイナイト再保険」に関して解説されている。一時期のブームに比べると最近はやや寂しくなってきたものの、この種の派生手法が最適のリスクマネジメントとなる局面もあることを踏まえて一定の知識を備えておくべきであろう。



保険という知的生産物の中で、世の人々・事業者が安心して活動できる

[評者] 大知 久一 (日本損害保険協会専務理事)

III部の「再保険のチャレンジ」では著者の長年の主張が色濃く出ている。「サイバーリスク」「NDBI(財物損害を伴わない事業中断リスク)」「大規模自然災害」「新しい再保険」等に関する、自説が展開されている。

最後のリスク引受人2 日本経済安全保障の切り札―巨大自然災害と再保険 (同、13年)
▽『リスクの本質と日本人の意識』(同、15年)
▽『グローバル経済下のサブライチエーションとリスク』(同、19年)
▽『大変革社会とリスク―試される日本の本気度と保険による自助』(同、22年)
(A5判/314頁、保険毎日新聞社刊、24年2月14日発行、税込3740円)